
大江戸カラクリ大捜査

天月火馬人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大江戸カラクリ大捜査

【Nコード】

N9176T

【作者名】

天月火馬人

【あらすじ】

電気さえない江戸時代に、科学捜査を様々な工夫で行い、親友のえん罪をはらそうと頑張る少年のお話です。
全部で14章ほどになります。

児童向け&コミカルタッチなので、肩の力を抜いてお楽しみ下さい。

この作品は、2010年の、ある児童向けの小説コンテストで、二次選考（三次が最終）まで残った作品です。

(応募したものに加筆&修正を加えています)

闇夜のうつろ船と灰色の怪人

時は元禄。東京がまだ江戸と呼ばれていた、今から数百年もの大昔。

車や飛行機などなく、人々は歩いて山を越え、夜はロウソクの炎だけで暮らした。今ではそれを想像する事さえ難しい、そんな時代。もちろん事件の捜査だって、現代とは違って科学捜査などはなく、時には、無実の罪で罰せられる人もあつたかもしれません。

ここは、そんな江戸と、よく似たパラレルワールド。よく似てるけど、どこかがちよつと違う……そんな世界での物語です。

月が出ないこんな夜は、墨で塗りつぶしたような真っ黒な闇だけがどこまでも広がっている。まだ電灯や車などが発明されていない江戸の夜は、まるでこの世の終わりのように暗く静かで、なにか恐ろしい。

たとえ、闇の中から妖怪がひよいと一つ目を出して「やあ」と言っても、巨人の巨木のような毛だらけの足が、目の前に立ちほだかっついていても、ありそうだとつい納得してしまうだろう。

だけど、今夜はそんな摩訶不思議な事が、実際に起ってしまったのだ。

この静かな江戸の夜を、突如、切り裂くように鳴るキーンという甲高い不気味な音。それは辺りに耳鳴りのように鳴り響き、家々をビリビリと震わせ始めた。だが、その音は次第にかすれるように消えていき、やがて、またもとの静寂が江戸の町に戻った。そして、空には、いつものまあるいお月さまがポツカリと浮かんでいる。

いや、何かがおかしい……月なのに雲の前に飛び出しているでは

ないか。

よく見ると、それは月ではなく、巨大な釜のような物が、ボウツと光りせながら夜空に浮かび上がっていたのだ。そして空から地上の人々を見張っているかのように、空中ですっとユラユラと揺れている。

しかし、その空飛ぶ釜は、ゆっくり動き出したかと思うと、その数十メートル先でフワフワと浮いていた。空飛ぶ釜は、わずかまたたく間に、これだけの距離を移動したようだった。

すると、それを皮切りに、空飛ぶ釜は狂ったように空を飛び回り始めた。ジグザグに移動したかと思えば、消えては現われ、そしてまた恐ろしい程の距離を移動した。空飛ぶ釜はそういう事を何回か続けたかと思うと、まるで遊びに飽きた子供のように、急にプイッと夜空から消え去ってしまった。

その夜は、たくさんの江戸の人々が、その空飛ぶ釜を目撃したのだと言う。そして、その空飛ぶ釜は、いつしかうつる船と呼ばれるようになった。その正体が謎なので、ぼんやりしているという意味の虚ろから、名付けられたのかもしれない。

だが、この事件は、それだけでは終わらなかったのだ。

キラキラと照りつける夏の太陽の下、納豆でもかき混ぜるように人が溢れかえる江戸の大通り。たえず人々の話し声や、売り子の呼ぶ声、荷車の馬のいななきなどが聞こえ、様々な音が入り交じって洪水のような大合唱になり、毎日がお祭りと同じく変わらなかった。

その一角で、瓦版（昔の新聞）を売るおじさんが、ある事件を大声でまくしたてている。道行く人々はいぶかしげにその声に振り返っては、吸い寄せられるように続々と集まって来るのだった。

「出たよ！ うつる船に乗ってやって来た、全身灰色の謎の妖怪、愚霊ぐれい！」

瓦版売りがそう叫べば、その隣の瓦版売りが、もつと声高に叫ぶ。「怪奇！ 愚霊に連れ去られた家畜達！ こっちの瓦版には、もつ

と詳しい事が書いてあるよ！」

そう、あの事件は、ただ、不可思議な物体が空に現われた！ だけで終わるものではなかった。

このうつろ船が夜空に現われると、その夜は必ず、全身灰色の謎の生命体、愚霊の集団が、どこからともなく現われ、裕福や貧乏を問わず、その家からお金や家畜などを片っ端から盗んでいくのだった。そして、時折、不敵にも犯行現場に勝利の宣言を残していく。それは『みすてりい文字』と呼ばれた。

だが、相手が、うつろ船に乗ってやって来た謎の生命体では、奉行所（昔の警察）の捜査は、ただ混乱する一方で、いつしかその被害数は数百件にも膨れあがっていた。

やがて人々は、まるで幽霊の話でもするように、恐れながらうつろ船事件の話の口にするようになり、今や江戸の町は、この話題で持ち切りになっていた。

うつろ船について様々な憶測が飛び交い、うつろ船の名を付ければ何でも売れた。時にはデマも飛び出したかと思えば、中には信仰する者さえもいた。

中には、今、巷で有名な義賊『赤いかまいたち』が、愚霊に化けているのだという声もあった。赤いかまいたちは、悪人達からお金を取り返す為だけに盗みをはたらく正義の義賊だ。『それはありえない』という声と『それが真実だ』という声で、一時、多くの瓦版屋の間で大論争が起きるほどの騒ぎになった。しかし、ある日、愚霊と赤いかまいたちが同時に現れた日があり、論争はあっさりと終わった。結局、赤いかまいたちの人気を裏付ただけで終わった。世間はこのようにして大騒ぎをしていたが、結局、誰もその真相は分らなかった。

だが、世間がこれほど騒いでも、全く興味を示さない人物が、たった一人だけいた。

彼の名は、手九野 才円。歳は十二。その顔にあまり表情はないが、丸い黒縁メガネの奥の目はとても優しかった。折れそうな細い

体と丸く美しい顔は、彼の繊細で大人しい所をよく現わしていて、時には女の子と間違えられる事もあった。

そんな彼は今日も、着物に袴姿で、腰の刀を重そうに引きずりながら、寺子屋（昔の学校）からの帰り道を急いでいた。

その背中には、『腰抜け』『意気地無し』などと書かれた紙がいくつも貼つてあるが、才円はそれにはかまわず、近所の貸し本屋に滑り込むと、居眠りしている店主の前で大声で叫んだ。

「おじさん！ 新しい西洋の本、入った？」

「ああ、ビックリした。才円ちゃんか。ハイハイ、ちゃんと取つてあるよ」

店主がシワだらけの手で本を差し出すと、才円はひったくるように受け取つて、その場に座り込んですぐに読み始めた。店主はそれを暖かい目で見つめている。

「それはそうと、才円ちゃん……また背中、何か書いてあるよ」

「はい。みんな十二にもなつて、まだこんな漢字が書けなかったので、僕が教えてあげたんです」

店主はやれやれと大きく首をすくめて少し微笑むと、また居眠りを始めた。才円は目を輝かせながら、英語だらけの西洋の本にいつまでも見入っていた。

今の世は、剣が全てを支配する武士社会。だが、才円は剣が大きい苦手……いや、むしろ毛嫌いしていた。暴力的なものは彼の性には合わないのだ。

そういう事で、彼はいつもまわりからバカにされていたが、その代わり、西洋の学問については誰よりも詳しくかった。

彼はあつという間に独学で英語を習得し、西洋の学問書から様々な知識を得た。その中で、彼はなにより『さいえんす』（科学）に惹かれた。

そして、さいえんすの観点から見れば、うつろ船も何かの力ラクリに過ぎない、彼はそう考えていたのだった。

あきはばら通りの女中茶屋

才円は小脇に大きな書物を数冊も抱え、夕闇を一人で歩いている。だが、その方向は、なぜか彼の家のある方角とは、全く逆の方向だった。

やがて、辺りに人の姿がチラホラと見え始めると、町の喧騒も激しくなってきた。

この辺りは、色々な奇妙キテレツな店があつて、『飽き飽きした人生もバラ色になる！』と言われ始めた事から、飽きはバラ、『あきはばら』通りと呼ばれている。

才円が、あきはばら通りの一層、賑やかな大通りに入ると、大きな茶屋（茶などを出す休憩所）が目の前に現れた。店の外装にはきらびやかな飾り付けがなされ、中からは陽気な三味線の音が手招きするように流れて来る。

そこは勉強一筋の才円には似合わないように思えたが、彼はためらいもなく、その店ののれんをくぐった。すると、すぐに女中が飛び出して来て、艶やかな長い黒髪を大きく揺らしてお辞儀しながら、大声でこう言った。

「お帰りなさいまし、だんな様」

女中は、猫のような、その釣り上がった大きな黒い目を細めながら、上目使いに才円を見上げた。その口元には勝ち気なイタズラっぽい笑みが浮んでいる。西洋人のように整った美しい顔に、白い肌が目に眩しい。歳は十七、八と言った所だろうか。

『お帰りなさいまし、だんな様』というのは、この店の特殊な挨拶で、女中達の御主人様になった気分を客に味わって欲しい、という店側の気の利いたサービスだった。

そして、全ての女中の頭の上には、なぜか猫の耳のようなものがあり、服は一見、西洋のメイド服に見えるが、実際は、カラフルな着物に西洋のフリルを味付けするという、和と洋をグチャグチャに混

ぜたような格好だった。だが、全体を通して見てみると、まるで絵巻（絵付きの物語）の中の美少女が、現実世界に飛び出して来たような、そんな不可思議で幻想的な空気が、この店全体を包んでいた。「なんだ、才円か……愛想振りまいて損した」

才円を出迎えたその女中は、相手が才円だと気付くと急に態度を変え、開け放した笑顔で才円の髪を乱暴にクシャクシャと撫でた。才円が無表情のまま奥の方の席に着くと、その女中は仕事を放り出し、猫がすり寄るようにして才円の横にチョコンと座ると、才円の顔をその大きな目で覗き込む。

「冷凍豆ひき汁」

才円は注文だけすると、小脇に抱えていた本を広げて、黙って読み始めた。女中は両手で頼杖をつくつと、そのクリツとした黒目を寄せて、まだじつと才円を見つめている。

「はあ……女中茶屋のナンバーワン、この猫女ねいめさまが、隣に座つてあげているというのに……相変わらず、そっけないなあ、才円は」
ナンバーワンと自分で言うだけあって、猫女のまわりには、既にそわそわした客が集まり始めていた。それに気付いた猫女が、甘えたような笑顔で可愛く招き猫のポーズをチョイとしてやると、客達は「萌え〜」という謎の言葉を発しながらバタバタと倒れていく。
「な、なんで、あたしに寄つて来るのって……こんな、頭、悪い男ばっかなの？」

猫女はその笑顔を固めたまま、周りに聞こえないようにそつとつぶやいた。

バン！ ドッシン！ ゴロゴロゴロ……

その時、店の外で信じられないくらいにうるさい音が聞こえて来た。それは、雷と太鼓とシンバルと一緒に鳴らしたような大騒ぎだった。

女中達は思わず、本物の猫のように体をビクンと跳ねさせたが、猫女だけは、またか……ともらしながら、首を小さく左右に振っただけだった。

「てやんでい！ べらぼうめっ！ おととい来やがれえ！」

外からは、今度は時代劇でよく聞いたようなセリフが聞こえて来る。だが、急に静かになり、後にはただ、荒い鼻息だけが残っていた。やがて、その荒い鼻息は、ジリジリと店に近付いて来て、店内に軽い緊張が走った。そして、店ののれんがパン！ と弾かれるように上がると、そこには、色黒で眉の太い、りりしい青年の顔が覗いていた。

その頭の上には、鏡餅のような大きいコブがあり、今の騒動の激しさを物語っている。そして、相手を飲み込んでしまいそうなその力強い目は、店内をギョロギョロと見渡し始めた。

その青年は、さらしに着物を軽くはおっただけの簡単な服装で、ひきしまった筋肉質な体が陽射しに黒くテカッていた。そして、さらしには、無造作に差した銀色の十手（罪人を捕らえる為に使う道具）が鈍く光っている。そう、彼は岡っ引（昔の警官）であった。

「おうっ！ やっぱり、いたな、親友！」

青年は顔をクシャクシャにして優しそうな笑みを浮かべると、可愛い女中達には目もくれず、まっすぐに才円の所へ飛んでいった。

「鉄あにい！」

いつも無表情の才円の顔がみるみる輝いていく。猫女はそれを横目で見て、不機嫌そうにツンとそっぽを向いた。

才円が自分に合わないこんな店に来る理由はこれだった。時折、ここをおとずれる親友に出会えるチャンスを、才円は待っていたのだ。

「そ、その頭……」

才円はすぐに異変に気付き、声をひそめて心配そうに言った。だが、鉄は得意気に笑う。

「なあに、ちよつとした捕物（逮捕劇）さ。貧乏人をいじめる悪い奴等がいたもんでね」

鉄はさらしから十手を取り出すと、才円の前にサツとかざしてみせる。才円の目には、鉄が悪人達を、まるで手まりのように、地面

に叩きつけては蹴り飛ばす絵が浮かんでいた。

「この『竜花火の鉄』がいれば、江戸の町も安泰だぜ！」

鉄はそう言うと、店中に響くような大声で高らかに笑った。

……とは、あくまで鉄の言い分だが、町の人々は、彼を『昼花火の鉄』と呼んでいた。昼の花火……つまり、勢いはあるが役には立たない、そういう意味だ。彼は鉄砲玉のような男だが、ゆえにドジばかりやらかしていたのだった。

しかし、これは悪口ではなく、彼への親しみを込めて、愛称として付けられたものだった。

正義感に溢れ、弱い人を見ると放っておけない、腕っ節も相当なもの。まるで溶かしたばかりの鉄のように熱いこの男。こんな鉄を町の誰もが愛していた。そして、それは才円も同じだった。鉄だけが、こんな時代に剣が苦手な才円をバカにしなかった。そして、才円は鉄のそういう男らしい所にずっと憧れていた。

「なによ、ここに美少女がいるってのに、男同士でイチャイチャして！」

猫女が体を異様にねじらせながら、才円と鉄の間に割って入って来る。

「ねえ、鉄あにい。才円ったらね。毎日、こんなの背中に貼られるんだよ」

猫女は才円の上体を乱暴に倒すと、背中から悪口の紙を剥がして鉄に見せた。才円は慌てて鉄から顔をそむけ、顔をそっと赤らめる。どうやら鉄に見られるのだけは恥ずかしいようだ。

「いくじがないというか……なんか言ってやってよ」

才円は恥ずかしそうにうつむいている。だが、鉄は、そんなウツな空気を吹き飛ばすように大声で笑った。

「ハハハハ！ 女つてのはどうも勘違いしていけねえな。腕っぶしが強いのと、男らしいのは別もんだぜ、乱暴者と正義の味方が違うようにな」

才円は思わず鉄の顔を見上げる。鉄も才円を見つめると、その大

きな腕で才円の肩を優しく抱き寄せた。

「でも、なにも正義の味方になれって訳じゃあない。あんなもん、誰もがなれるもんじゃねえからな」

鉄は少し遠い目を見ると、古びたボロボロの十手を、懐かしそうに見つめながら言った。いつも男らしいその顔に、今まで見せた事のない、少年のような無邪気な笑みが浮かんでいた。

「まあ、どんな事だつていいやな。今、自分が出来る事を、誰かの為に一生懸命やる。結果なんかどうでもいい、人に負けてもいい。ただ、今を、最高の自分で生きる。それが出来るのが……本当の男、つてもんじゃあねえかなあ……」

鉄はそう言うと、また才円を見つめ、あのクシャクシャな優しい笑顔で笑った。才円は目に涙さえ浮かべ、何度も何度もうなずいていた。二人の世界からすっかり追い出された猫女は、呆れた表情をしながらも、こんな二人に密かに暖かい視線を送っていた。

これが、この三人のいつもの日常だった。ささやかではあったが、それなりに幸せな日々だった。しかし、こんなささやかな幸せでもいつか壊れる日があるのだと、この時の才円は思い付きさえしなかった。

人生初めての試練

江戸の賑やかな通りをちよつと外れると、まるで台風でも通り過ぎたように荒れ果てた貧しい通りがある。そこには屋根だけの簡易的な家や、ボロボロの長屋（昔のアパート）などが、肩を寄せ合うようにしてひっそりと建っていた。ここは貧乏人達が最後に行き着く場所と言われていたが、貧しいながらも、みんな、それなりに楽しく暮らしていた。

才円は、ここにある長屋の一角で、静かに一人暮らしをしている。彼は毎日、寺子屋に行く前に、早起きして近くの川に釣りに行き、釣れた魚を売っては、細々と日々の生計を立てていた。彼は幼くして、既に両親を亡くしていた。

そんな働き者の才円も、朝の布団の暖かな誘惑には、いつも苦戦を強いられていた。部屋の日時計は、とっくに釣りに行く時間になっている。

「ああ、もう行かなきゃ……でも、あと、もう少しだけ……」

才円がそうやって、布団の中で出たりもぐったりを繰り返していると、いきなり部屋の木戸が全部、バン！ と弾け飛んで、外の冷たい風がビュビュウと部屋の中へ入って来た。才円の布団は風に踊るように根こそぎめくり上がり、彼は思わず震えながら飛び起きた。才円が戸口を見ると、そこには猫女が前のめりになって倒れているのが見えた。

「木戸くらい、開けて入れよお、猫女！」

「あ、あなた、のんきに寝てる場合じゃないわよ！ 鉄あにいが……連れていかれた！」

「えっ……」

鉄は両手を後で縛られ、みずばらしい着物姿で、下手人（犯人）として馬の上に乗せられている。目はうつろで、背中を丸めたその

姿は、まるで別人のようだった。

鉄の罪状が書かれた紙にはこうあった。『この者、愚霊の仲間により打ち首』

打ち首以上の重罪人は『引き回しの刑』として、見せしめの為にこうして馬に乗せられて引き回される。今回は世間を騒がせた事件という事で、見物に長い行列が出来る程の大騒ぎになっていた。

鉄の馬が才円の前まで来ると、才円は見物人の列から飛び出し、何度も転びそうになりながらも、必死で鉄の後を追った。

「僕は信じてるよ！ 鉄あにいが悪い事なんて出来る訳ないもん！」
だが、才円のそんな悲痛な叫びも、人々の喧騒に無残にかき消され、鉄の後姿はみるみる小さくなっていく。やがて、才円は力尽きて倒れたが、その目はいつまでも鉄の背中を追っていた。

「きつと……愚霊の奴等の仕業だ」

猫女その言葉に、才円は、昨日の女中茶屋での会話をハツと思い出した。

（鉄あには、うつろ船事件の事で『このあざやかな盗みの手口は以前にどこかで見た』と言っていた。もし、鉄あにいが重要な所まで調べ上げていたのならば、愚霊が何かしら裏工作して、邪魔な鉄あにいを始末しようと思んだのかもしれない）

そう思い付くと、才円は血が出る程に拳を握りしめた。

（それしか考えられない。だって、鉄あにいが愚霊の仲間の筈がないんだから！）

鉄が愚霊の仲間。それは、鉄をよく知る町の人々の目にも無理があると思えた。だが、科学捜査のないこの時代、無実の囚人はそう珍しくはなかった。そして、鉄は理不尽に罪を着せられたまま、首を斬られるのを、ただ待つしかない町誰かが思っていた。

才円は思い詰めた表情を見ると、急に立ち上がり、鉄の乗った馬に背を向けて足早に歩き出した。

「ち、ちよつと、才円。こんな時にどこ行くのよ」

「僕が……鉄あにいを助ける」

「なにバカ言ってるの？ あんたみたいな臆病者のガキンちよに、
一体、何が出来るっていうのよ！」

才円は珍しく猫女をキツと睨み返した。その迫力に猫女は思わず
身を縮める。

「今の日本の捜査だと、鉄あにはこのまま打ち首を待つしかない
かもしれない。だけど、僕には、さいえんすがある……」才円はつ
ぶやくようにそう言った。

「さい……えんす？」

「そう。僕は、西洋で行われているさいえんすによる捜査（科学捜
査）というものやってみようと思うんだ」

才円の目には、今まで見せた事のない燃えるような光りが宿って
いた。それは親友の命を救う為に、未開拓なこの時代に、たった一
人で立ち向かう男の目だった。

花はささやく

江戸の賑やかな大通りに、最近、開店したばかりのおしゃれな呉服屋があつた。不運な事に、ここは開店してすぐに、うつろ船事件の被害にあつてしまつた。新装開店で勇んでいただけに、町の人達の間では同情の声がよく聞かれたが、皮肉にも、それによつて、この店の名は江戸中に広まる事になつた。

さて、この店の裏庭には大きな倉がある。そこが愚霊に盗みに入られた問題の場所だつた。この倉の周りには広い庭があり、高い塀で四角くグルリと囲まれていた。

その塀の隙間から、可愛い子供の顔がヒョッコリと突き出て、なにやら辺りをキョロキョロと見回している。その子供とは、もちろん才円だ。

才円は辺りに誰もいないのを確かめると、小さな体をうまく折り曲げて、堀の隙間から中へと這つていった。才円が人の家にコツツリ忍び込むのは、もちろん初めての事だ。緊張で思わず喉がゴクリと鳴る。

庭へ出ると、あふれだすように一面の花々が才円を迎えてくれた。その中央には背の高い木が大きな影を庭中に落としていて、ヒンヤリとした風が才円の頬を撫でていく。時折、遠くから、かすかにこの店の呼び込みの声が聞こえて来るが、それ以外は時が止まったかのように静まり返つていた。

才円は、とにかく愚霊が忍び込んだ倉を調べてみたかつた。そこに、何か事件の手掛かりがあるかもしれないと思つたからだ。

「さいえんすの捜査は、やっぱり現場検証が基本だろうからね……」
才円はつま先立ちしながら、とにかく倉のある場所を探して回つた。

すると、庭を大体一週した頃、土を踏み荒らした複数の足跡が、アリのように一列にどこかへ向かっているのが目に入った。

(これだ！)

才円は思わず声を上げそうになる。それが、愚霊が倉へ押し入った時の足跡に間違いなかったからだ。なぜなら、主人は近所でも有名になるほど庭園にこだわりを持っていて、店の者達の庭の出入りを固く禁じている。

だが、主人は店が被害にあつてからは、庭の事など忘れ、事件当時のままに放っておいたらしい。しかし、それは才円にとってはラッキーな事だった。

才円はふところから大きな虫眼鏡を取り出すと、顔を地面にこすりつけるようにして、その足跡をまじまじと眺め始めた。愚霊達は、そうとう重い物を盗んでいったらしく、その足跡はクツキリと刻まれている。

だが、才円は、すぐに肩を落として大きな溜息をつく。

(なんだ、ワラ草履か……ワラ草履なんて、どこの店も同じだ。これだけで、下手人を割り出すのは難しいな)

才円はいきなり捜査の壁にブチ当たってしまった。もしこれが現代なら、皆、たいていは靴を履いている。靴底というものは多種多様で、どのメーカーの靴かが分り、それにより趣向などが判明する事もあつただろう。いや、それ所か、最新のDNA捜査により、今頃、事件はとくに解決していたかもしれない。しかし、どうあがいても、今は江戸時代。彼はこの未開拓の時代に、常に悩まされ続けなければならぬのだ。

才円は気を取りなおすと、とにかく、足跡を追って倉へと向かった。

倉への道にも綺麗な花が咲き乱れていたが、ある箇所に行くと、まるでえぐられたように花がなくなっており、その下の地面に花達がパラパラと落ちていた。

(可哀想に……)

才円は思わず足を止め、腰をかがめて、その花の一つを拾い上げてやる。

よく見ると、莖には刃物の切り口があった。おそらく、下手人が通行の邪魔だと刀で切り落としたのだろう。その後で、下手人に踏まれたらしく、ワラ草履の跡がスタンプのように付いていた。才円は、憐れみを込めた目でしばらく花を見つめていたが、その目が急に、電球が付いたようにパツと輝いた。

（あつた！ 鉄あにいを無実にする証拠が！）

才円は奉行所の門の前に立っていた。この巨大な門は、見上げるだけで後に倒れそうになる程で、その絶対的な国家権力を、町人達に誇示しているようにも見えた。

この門の向こうに鉄あにがいる……才円はそう思うと、会いたくて、いてもたってもいられなかったが、まずは、ある人物に会って、ある物を見せなければならなかった。

しばらくすると、奉行所の門が、悲鳴のようなきしむ音を立てながら、重そうにゆっくりと開く。

そして、その中から、黒い羽織を着流しにし、腰に特注のきらびやかな刀を誇らしげに差した中年の同心（現在の刑事）がヌツと現われた。その顔は無精ヒゲが伸ばし放題で、実際の歳よりも老けて見えた。

彼は腹をボリボリとかきながら、あくびまじりで辺りを見回したが、足下の才円に気付くと、あざ笑うように言った。

「ワシを呼んだのはお前か？ なんだ、まだ子供じゃないか」

いきなりの無礼に、才円はムツとしたが、今は、ある物を見せる方が先だった。

「うつろ船事件の担当の方ですね。実は、僕……鉄あにいが無実だという証拠を持って来ました」

「なに？」 同心は半笑いの表情で、才円をジロジロと見回した。

「僕なりに、西洋のさいえんす捜査で行われている、生物学から考えてみたんです。例えば、死体にわいたウジ虫の状態から、死亡時刻を割り出したりとか……」

才円は、そんな気持ち悪い事を、まるで世間話のようにサラッと言う。同心は思わず眉をひそめて才円を睨んだ。

「だけど、今回は殺人ではないので、何かないかと、色々と探してみました」

才円は巾着から、先程の、足跡付きの花を取り出す。

「これは犯行現場に落ちていた花です。下手人は犯行時に、庭の花を切り落として、踏んでいったようです。この切り口と足跡がそれを示しています」

才円はそう言うと、花を同心にヒラヒラと見せた。同心はただ黙っている。

「だけど、一つだけ気になる事があります。それは、この花が咲いた状態で踏まれていたという事です」

「花は大抵、咲いているものではないか？」同心は小馬鹿にするように口を挟む。

「いえ、この花は二ホンアサガオと言って、丑の刻（一時から三時）から龍の刻（七時から九時）の間にだけ咲くんです。つまり、この時間内に、犯行は行われたという事になります！」（二ホンアサガオは、一時頃から咲き始め、四時頃に満開、九時頃までにしぼむ）

同心の眉がピクリと動いた。

「しかし、その時間は、鉄あにいは居酒屋にいたんです。目撃証言だつてあります。どうか、鉄あにいの事を、もう一度、よく調べなおして下さいませんか！」

大人しく才円の訴えを聞いていた同心だが、横を向いて少し考え込むと、才円の方に向き直り、ようやくその重い口を開いた。

「それがどうした？」同心はふくみ笑いでそう答える。

「え？」

「西洋の捜査はどうかしらんが……ここは日本だ。取り調べは日本のやり方でやる」

「日本の……やり方って？」

同心は、もはや才円に背を向け、その場を立ち去ろうとしていた。

「まあ、下手人つてのは、少し痛めつけてやれば、本当の事を吐くものだよ」

才円の顔からさつと血の気が引いた。才円の耳に鉄の苦しげな悲鳴が聞こえたような気がした。才円のキツク握りしめたその拳は、怒りにワナワナと震えだす。

「ご、拷問したんだな、鉄あにいを！ それで無理に自白させたのか！ そんな証言、西洋じゃ証拠として認められてないよ！」

才円は矢のように同心の足に飛びついた。すると、同心は急に怒りをあらわにして、才円の体を強く押し、その小さな体はたやすく地面に転がった。

「ここは大人の仕事場だ！ お前みたいな子供は、何でも黙って大人の言う事を聞いていればいいんだ！」

同心は、才円に怒声を浴びせると、地面を踏みつけるようにして奉行所の中へ消えていった。才円はその場にうつぶせになったまま、ポロポロと大粒の涙を何度もこぼした。

狙われた才円

鉄の打ち首の日まで、あと数日と迫っていた。

確かに鉄は拷問により自白した。だが、それは拷問の苦しさからではなかった。

鉄の様子は最初から何か妙だった。ある程度、愚霊の何かを知っている筈なのに、黙して何も言わない。ウソや曲がった事が大嫌いで有名な男だから、この態度は、なおさらおかしく思えた。

しかし、ある日、突然の自白。一体、彼の心の中には、何が秘められているのだろうか？

そんな鉄の命を救い出せるのは、もはや才円の科学捜査だけだった。科学により、決定的な証拠を突きとめるしか、もう手は残されてはいなかった。

窓の外は赤く染まり、小雨がパラパラと降り始めている。部屋のいろりには鍋がかけられ、その蒸気がこのあばら屋を暖めていた。

才円は黙っているの炎を見つめている。頬を伝う涙の跡が炎に照らされ、キラキラと光っていた。

(僕なんかじゃ、どうせこの程度か……)

才円の脳裏に、自分をからかう生徒達の姿や、鉄が自分を励ます顔などが、次々と浮かんでは消えていった。

(僕は鉄あにいのような、男らしい男になりたかった。勇気も貰った。だけど、結局、僕は何もしてあげられなかった)

才円はゴロンと寝転がると、湯気ですっかり曇ったメガネ越しに、蜘蛛の巣だらけの天井を見上げた。

(僕には、やっぱり、無理なのかな……)

才円は自分に何度もそう問いかける、しかし、才円の心の奥底では、悲しい答えが既に出ていた。

才円はそうやって、しばらく天井を見つめていたが、やがて、ゆ

つくり上体を起こすと、のろのろとかわや（昔のトイレ）に向かった。才円が戸口を開けると、外はもうすっかり灯り一つ無い暗闇になっていた。

しばらくして、才円が落ち着いた表情で戻って来ると、家の中にありえない光景を目の当たりにして、思わず体が音を立てて後ずさった。

まるで部屋の中を汚すように、泥だらけの足跡が入り口から奥まで伸びていた。そして、その奥の壁には大きな紙が貼られ、墨で大きくこう書かれてあった。

『じゃまものには し』

それは明らかに愚霊からの脅迫状だった。ほんの少し、ちよつと家を出た間に、これは行われたのだ。今、こうしている間にも、自分の背中を、愚霊が恐ろしい目付きで睨んでいるかもしれない。そう考えると、才円は背筋がゾツとし、体が勝手にガタガタと震え出した。

猫女は、女中茶屋に住み込みで働いていた。昼は助平な男どもにジロジロ見られ、夜は遅くまで店の後片付け。最近は、鉄の事件の事まであり、今の猫女は、体も精神も疲れ果てていて、幸せを感じる時といえは寝る時だけだった。

「にゃあ、みな、ひざまづくがいいにゃあ……」

猫女は謎の寝言を言い、妙なうすら笑いを浮かべながら、今、幸せの絶頂にいた。

だが、そんな幸せな夢の中で、猫女は何か妙な違和感を感じていた。なぜか、先程から、誰かに見られている気がするならない。

そんな夢とも現実とも分らない世界の中で、猫女がボンヤリと目を開けると、猫女を見つめる誰かの顔が、すぐ目の前にあった。

「にゃあああ！」

猫女は猫のように飛びのくと、部屋の隅まで転がりながら逃げた。しかし、突然、今まで見せた事のない鬼のような形相になると、ド

又の効いた声でこう叫んだ。

「何者だ！」

「ぼ、僕だよ、才円だよ……」

猫女はその声に、慌ててもとの猫女の顔に戻した。

「なあんだ、才円かあ」しかし、猫女はすぐに目をパチクリさせる。

「……じゃないわよ！　なによ、こんな夜中に、美少女の部屋へ忍び込むなんて！」

「だって、僕、狙われているんだよ！」

「へ？」

才円は猫女の胸元にいきなり飛び込んだ。

「ちよっ……！」猫女は顔を赤らめ、思わず身を固くする。

「助けて！　僕、殺されちゃうよ！」

才円はそう叫んで、小さな体を震わせている。才円が猫女にこれほど感情を見せたのは初めてで、猫女は正直、驚いていた。

（普段、学問がどうか難しい事ばかり言ってるけど、やっぱりまだ子供なんだな……）

猫女は優しく目を細めると、才円の髪を優しく撫でながら、そつと抱き締めてあげた。

「大丈夫、お姉さんが守ってあげるから……」

闇夜のかまいたち

「愚霊から隠れるっても、いくらなんでも、これは……」

そういう才円の頭には、可愛い猫耳がピンと立っていた。メガネは外され、顔には化粧がほどこされていた。才円は猫女に無理やり女装させられ、女中の一人に仕立て上げられていたのだ。いつまでも納得いかなそうな才円に、猫女は口元に、いつものイタズラっぽい笑み浮かべながら言う。

「追われてるんでしょ？ 変装してた方が安全よ」

「でも……」

才円はしきりに足をねじって、モジモジしている。スカートがどうにも気になるようだ。

「スカートって慣れれば、結構、スースーして気持ちいいものよ」

「そうかなあ……」

猫女は隠してはいるが、先程から、やたらとチラチラ才円の事を見ている。猫女の才円を見る目がいつもと違うのは、才円の気のせいではなかった。

才円はメガネを取るとかなりの美形で、女装もよく似合っていた。彼が美しい事を見抜いていた猫女は、前々から、才円にこういう事をさせてみたいと狙っていた。人形にお化粧などをするのは、女の子の楽しい遊びの一つである。今回は緊急事態という事ではあるが、こういう形で猫女の夢は、今、叶ってしまったのだった。

「で、猫女、僕はここで何すればいいの？」

「まあ！ 職場の先輩に対して、何、その口の利き方は？ 猫女お姉様と呼びなさい！」

「や、やだよ！」

「あんただけ、呼び方違ってたら怪しまれるじゃない！ さあ、はやくー！」

「でも……」

「はやく！」

「お……お姉……様？」才円はしぶしぶ言った。

猫女は先輩ぶって、厳しい表情ですっと才円を睨んでいる。だが、口元がホロリとゆるむと、後はなだれのように顔が崩れ落ちていて、だらしのないニヤケ顔になった。

「か、可愛いいいい！　こんな妹、欲しかったのおおお！」

猫女は思わず、才円をぎゅううつと抱き締める。

「や、やめる、バカ猫女！　恥ずかしい！」

「やだ！　だって、可愛いんだもんんん！」

猫女はいつもよりはしゃいでいた。才円には、自分を励まそうと猫女が必死なのが伝わって来た（半分は本気だったが）。まだ、少しひっかかってはいたが、才円は、この女中の格好を受け入れる事にした。

その日の女中茶屋は、妙な盛り上がりを見せていた。新しく入った美少女女中の周りにいつもとは違う人ばかりが出来ていたからだ。それは男の客ではなく、ほとんどが女の客だった。

「可愛い！　お人形さんみたい！」

「こつち向いて！　この、おまんじゅうあげる！」

才円は言われるまま、客達に人形のように弄ばれる。だが、才円のあまりの人気に、猫女はだんだんと機嫌が悪くなっていく。

「猫女様がこんなに暇なの……初めてだわ」

猫女は畳の上にあぐらをかいて、暇そうに才円を睨んでいる。

「猫女……お姉様、た、助けて！」

「やなこった」

こうして、才円の女中デビューの初日は、なんとか無事に終わった。

店でさんざん働いて、相当、疲れている筈なのに、才円はなかなか寝付かれなかった。

自分は愚霊に監視されていた。ひよつとしたら、もつと以前から……そう考えるだけで、嫌な汗で体中がじつとりと湿る。

色々な事を考え過ぎたせいか、今日は背中に妙な視線を感じる。「まさかな、こんな所まで……」

しかし、なかなか寝返る事が出来ない。才円は後を見るのが恐ろしかった。昼間、自分の周りあまりににぎやかだったせいか、今の死んだような闇夜は、そんな不安をさらに増させる。

だが、こうして、いつまでも後を見ない事は、誰かが見つめていと認める事になる。才円はどうしても、そんな事は認めたく無かった。

(一度確かめれば、それで終わるさ。やっぱり何もなかったってね) 才円は自分にそう言い聞かせると、思い切って寝返りをうった。

その瞬間、思わず目を閉じる。一時の沈黙……。だが、辺りは静かなままだった。才円が恐る恐る目を開けると、真つ白な布団が月明かりで浮かび上がってくる。だが、やはり、そこには何もなかった。才円がふうと大きな溜息をつくとき、へなへなと体中の力が抜けた。

才円は、生気を取り戻すと、もう一眠りしようと、無邪気にゴロンと仰向けに寝転がった。すると、天井の隙間の闇から覗く二つの目が、じつと才円の事を見つめていた。

「わあああっ！」

才円は声にならない声を上げ、自分でも訳が分らないくらいに手足をもがかせた。才円は気付くと、目をむいて部屋の隅でガタガタと震え上がっていた。だが、闇の中のその目は、静かな声で才円に話しかける。

「安心しろ。私は愚霊ではない……」

「じ、じゃあ、何だっていうんだよ？」

才円はガタガタと震える口を、必死に動かしてそう叫んだ。

「私は、赤いかまいたちの頭かしら、お銀だ」

才円は目を向いたまま、今、何が起きているか、必死で理解しようとした。

「あ、ああ！ 君が、あの有名な義賊の……」
「そうだ」

お銀がそう言うと同時に、天井から何か四角い物が、ドサツ！と重そうに落ちて来た。才円はまた妙な声を上げる。

「それは、うつろ船事件の捕物帳の一部だ。事件の事が色々載っている。一冊、失敬してきた。奉行所のボンクラどもより、お前の方がよほど役立てそうだからな」

「僕に事件を解決しろと？」

「当たり前だ。お前が助けなくて、一体、誰が、あの無実の男を助けられるというのだ？ それに、お前のさいえんす捜査は、いつしか、世の中の無実の罪で苦しんでいる人々を、助ける事になるかもしれないのだぞ」

「で、でも、僕なんかじゃ……」

才円はそう言うて悲しげに顔をふせる。すると、天井から、お銀の呆れたような溜息が聞こえて来た。

「お前は一体、今まで、あの男の何を見てきたのだ？ 結果などどうでもいい、自分が今、出来る事を全力でやればそれでいい。あの男にそう言われたのではないか？」

才円はハツと顔を上げる。

「お前が本当に、あの男を親友だと思うならば、あの男が誇れる親友でいる。それが本物の親友というものではないのか……」

天井からは、それきり声がしなくなった。

『結果などどうでもいい、自分が今、出来る事を全力でやればそれでいい、それが本当の男だ』。才円は鉄のその言葉を、いつまでも心の中で繰り返し返していた。そして、その目には光が少しずつ戻って来ていた。

屋根の上で、お銀が満月を眺めながら座っている。その姿は、全身を赤黒い布で忍者のように覆っている。お銀が顔を覆っていた頭巾を取ると、長い黒髪がこぼれ落ちて、夜風の中を泳ぐように舞っ

だ。そして、その鬼のような表情をやわらげると、それは可愛い猫女の顔になった。

「まったく、世話がやける子なんだから……」

そう言いながらも、その表情には笑みがこぼれていた。そして、猫女は少し顔を赤らめると、つぶやくようにこう言った。

「でも……あいつなら、きつと、やってくれる」

悪魔の残像

才円は自分の部屋に戻ってきていた。

（愚霊め、来るなら来い……まあ、逃げるけど。でも、捜査はやめないぞ……）

才円は小さな物音にいちいちビクビクしながらも、なかばヤケクソ気味に、腹を決めて捜査に取りかかっていた。

才円は、お銀に貰った捕物帳に食い入るように見入っていた。

（確かに、凄い……詳しい事まで載ってる）

お銀の協力により、様々な情報を得た才円は、がぜんやる気になってきた。そして、ある西洋の学問書のページがふいに頭に浮かんだ。

「よし、今度は、西洋の『プロファイリング』というものをやってみよう。僕は妖怪とか、そういうものは信じない。どうせ、愚霊って、人間が変装してるだけなんだ」

プロファイリングとは、犯罪現場に残された様々な証拠を元に、犯人の容姿や性格などを予測して、犯人像を詳細に浮き上がらせていく、という捜査方法だ。

才円は、自分の部屋に脅迫状を貼ったやつヤツが、一体、どんな人物だったのか、プロファイリングにより浮き上がらせてみる事にした。

才円は、まずは表に出て、キョロキョロと辺りを見回した。

（あの日は小雨が降っていた。必ずどこかに、やつ足跡が残っている筈だ）

すると、才円の思惑通り、才円の家に向かう足跡がいくつが残っていた。一つは才円のものだが、もう一つのは大きい、明らかに才円のではない。才円はその足跡をまじまじと見て、少し考え込むと、ボソッとこうつぶやいた。

「ヤツは体を右に向けて戸を開けている。おそらく右利き。そして、

この足の大きさだと成人男性に違いない……」

才円の頭の中に、右手で木戸を開ける怪しげな男の映像が浮かんで来た。

次は、才円は足跡をたどって、ヤツがやって来た方向へ戻っていく。すると、ある長屋の角で両足をキチンと揃えている。

「おそらく、ここで僕の部屋を覗いていたんだろう」

さらに足跡をたどる才円。

「歩幅は小さく内股。トボトボ歩く。自分に自信がなく内向的。おそらく愚霊達の中でも下っ端で、だから今回の役目をやらされている」

足跡は大通りまで続き、そこで大勢の足跡にかき消されていた。

才円は戻って、今度は、自分の部屋に残された足跡も見てみる事にした。

木戸を開けると、畳の上に乱暴に残された、泥の足跡がすぐに目に飛び込んでくる。才円は現場検証をする為に、荒らされた部屋には一切、手を触れずにいた。脅迫者の体温さえ残っていそうな荒れた部屋の不気味さは、才円に無言の圧力をかけてくる。だが、今の才円の目は、既に捜査員の目になっており、恐怖など忘れていた。

「足跡はまっすぐ壁まで続いている……いや、」

才円はメガネを指でちよいと上げて、足跡に顔を近付ける。

「ヤツは微妙に、いろりを避けている、なぜだ？ なぜ、いろりが嫌いなんだ？」

メガネを触れている自分の指をみて、才円は自分の行為を思い出す。

「そうか！ 僕もよくやる。鍋の湯気でメガネが曇るから嫌なんだ。指で拭くと手の油が付くし、曇りがななるまで結構、時間かかるし……」

……そう、ヤツはメガネをかけている」

才円はさらに、手掛かりを求め、首を回して部屋の中を見渡す。

そして、壁にある脅迫状の前で止まった。

「さっきから妙な匂いがあると思ってたんだけど……この癖のある

匂い、絵巻屋で嗅いだ記憶がある」

才円は脅迫状に鼻を近付ける。

「墨だ。この墨から匂ってくる。多分、絵巻作家たちが好んで使う『はいばあ墨、忍者』を使ってるんだろう」

才円はこれまでのプロフィールから、まるで木彫りの像を彫るようにして、脅迫者の人物像を頭の中に創り上げた。

「男性、内向的、メガネ、絵巻作家……いわゆる、よくありがちな絵巻オタク系……って感じかな」

絵巻オタク系……その言葉に、才円はすぐに、あの女中茶屋を思い浮かべた。あそこは絵巻オタク系達のたまり場になっているからだ。

「また、猫女に借りを作るのか、はあ……」

才円、逆襲を開始する

女中茶屋には、外に特設の舞台がある。そこで時折、客寄せにミニ歌劇を行うのだ。

今日はそこで、猫女がセクシーにアレンジした武将の衣装を身につけて、踊りながら元氣よく歌っていた。彼女が中央の細い管に向かって歌うと、中で反響して、左右の巨大な管から、声が大きくなって響き渡るといふ仕組みだ。

歌は、今、江戸で流行のカラクリ歌劇『大江戸戦隊、七福連者』の主題歌だった。

「七つの力を一つに合わせてえ〜」

猫女のお菓子のように甘い歌声が、江戸の大通りに響き渡る。すると、オタク系の人達が、まるで甘い物にたかるアリののようにゾロゾロと吸い寄せられて来るのだった。

猫女がミニスカートをヒラヒラさせて、楽しそうに踊りまわると、客達はまるで取り憑かれたように、一斉に髪を振り乱しながら、早く激しく体を動かし、雨乞いのような妙な踊りを始めた。これは、どうやら応援の踊りらしい。地面には、客達の魂の汗がいくつも飛び散っていた。

その横では、才円が女中姿で、客達に必死に呼びかけている。

「猫女お姉様の一周年記念という事で、メガネで絵巻好きの男性の方に、抽選で特製パラパラ絵巻を差し上げております！」

オタク系の絵巻好きの間で、圧倒的に人気があるのが、この『パラパラ絵巻』であった。これは、絵を少しずつ変化させたものを重ねて、一気にパラパラとめくると、絵が動いて見えるという絵巻。ようするに、『パラパラまんが』である。江戸時代には、もちろんテレビもアニメもないので、こういったものが飛ぶように売れていた。

パラパラ絵巻の中で、特に人気なのは、不思議な神通力を使う少

女が活躍する、仙女っ娘物などである。

「絵巻の内容ってどんなの？」

いかにもオタクといった風貌の客が、目をキラキラさせて才円に聞いてくる。

「は、はい……あの、猫女お姉様が、実は仙女っ子という設定で、その仙女に変身する場面の『限定版』絵巻なんです」

「仙女っ娘の変身場面！ 限定版！ 萌え〜！ 速攻で抽選に申し込むよ」

「有り難うございます。では、こちらに問答（クイズ）の答えを……」

「問答？」

「はい。さて、人気歌劇、『大江戸戦隊、七福連者』の、歌の出だしはなんでしょう？」

猫女の舞台は大成功だった。猫女の部屋には、山のような抽選の申し込み書類が積まれていた。才円と猫女は昼間の疲れが出たらしく、手足を投げ出してグツタリと倒れ込んでいる。窓からは明るい月が顔を覗かせ、まるで二人を癒すように、優しい光を浴びせてくれている。

「さて、これからが、もつと大変だぞ……」

才円はそう言うと、ガバツと起き上がり、腕まくりして書類に目を通し始めた。すると、猫女が猫のようにすり寄って来て、不思議そうに才円の手元を覗き込む。

「あんたの言った通りに舞台をやったんだけど……一体、どんな企みがあったの？」

猫女は目を輝かせて、無邪気に聞いて来る。

「僕に脅迫状を突きつけた人物は、どうもメガネでオタク系みたいなんだ。それで、メガネでオタク系の人達が書いた文字が欲しかったのさ」

「え？ どうするの？ 文字なんか集めて」

「集めた文字で『筆跡鑑定』をして、その中の誰が、あの脅迫者な

のかを特定する為さ。西洋のさいえんす捜査でやってる事だよ」
「ふうん〜。それ、どういう風にやるの？」

「人間にそれぞれに癖があるように、書いた文字にも癖がある。だから、文字の癖を調べれば、誰が書いたのかを判断出来るんだ」

「へえええ〜」猫目は大きな目を丸くする。

「例えば、この脅迫状は『じゃまものにはし』って書いてある。

で僕が、絵巻抽選の問答の答えとして、みんなに書いて貰った字は……」

才円は手元の書類を一枚取って、猫女に見せる。『にしにはまものじゃ』

「この『にしにはまものじゃ』から、必要な字だけを拾って、組み立てなおすと……『じゃまものにはし』になる」

「あ、本当だ」

「つまり、問答の申込書と、脅迫状とで、文字が似てるかどうかを調べて、誰が脅迫状を書いたのかを探しだすんだ」

「なんか凄い！面白そう、あたしも手伝うよ！」

猫女はそう言うと、柔らかな体をぐいぐいと押しつけて来て、才円を無理に押しやる。

「席、半分開けてよ」

「もう。猫女は、いつも勝手に決めるんだから……」

才円がそう言うと、猫女は舌を出してエへへと笑う。才円は、そんな猫女の可愛い笑顔を見て、心に新たな感情が沸き上がるのを静かに感じていた。

（僕は今まで、さいえんすの事はかり考えていたけど……猫女がいなきゃ、ここまで出来なかった。仲間って……いいもんなんだな）

才円がそう考えながら、猫女の顔をボンヤリ見つめていると、猫女は急に恥ずかしそうに顔をふせた。

「やだ！子供のくせに……お姉さんに惚れちゃったの？」

「ちっ、違うよ！そんなんじゃないよ……」

「ばあか、冗談よ。やあーい、ひっかかったあ〜」

猫女はあっけらかんとした顔で、才円の髪をクシヤクシヤと撫でる。才円は、なんだか妙に恥ずかしくて顔が耳まで赤くなった。

そして、二人はまるで姉弟のように仲良く肩を並べると、夜の更けるのも忘れ、山のような書類を少しづつ片付けていった。

書類の山が半分くらいにまで片づいた時だった。急に猫女が黙り込み、才円と目を合わせると、口にそつと人指し指を付けた。『静かに』の合図だ。

才円が静かにうなずくと、猫女は身を低くして四つん這いになり、障子の所まで猫のようにそろそろと忍び寄る。

次の瞬間、猫女は目に止まらぬ速さでかんざしを抜き取ると、力任せに障子に投げつけた。かんざしは矢のように障子突き抜け、外で男のうめき声が聞こえた気がした。

「誰よ！　そこで覗いてるのは！」

猫女がそう叫んで、障子を勢いよく開けると、暗闇の中に、庭の草花や茂みがあるだけだった。遠くでは鈴虫がのんきに鳴いている。「おっかしいなあ、てっきり、愚霊の奴が偵察に来たと思ったんだけど……」

猫女は頭をかきながら、パタンと障子を閉めた。

すると急に、闇の中で、茂みがガサガサと揺れ始め、中からニユウツと背の高い人影が突き出て来て、うっ！　と痛そうに肩を押さえた。その肩には確かにかんざしの傷があった。その男は茂みから飛び出すと、高い屋根を、人並外れた脚力で軽々と飛び越え、凄い速さで闇の中に消えていった。

ウソをついた少年

女中茶屋の奥の部屋には、メガネをかけた男達が数十名、集まって、何かをソワソワと待っていた。ふすまには『パラパラ絵巻 当選者の間』と書かれた紙が貼つてある。男達は夢にまで見たお宝を待ちながら、それぞれに雑談をしている。

しばらく経つてから、部屋のふすまが開いて才円が現れた。今回は女中の格好ではない。

「みなさん。今日はごくろうさまです。約束通りパラパラ絵巻を差上げます。しかし、実は、今日、みなさんに集まっていたいたのは、パラパラ絵巻の当選者だからではありません」

才円がそう言うと、男達は急に雑談をやめて、一斉に才円を見た。「うつる船事件の容疑者だからです」

才円のその言葉に、男達の中に、波が引くような大きなざわめきが起こった。

「これは、ある男の無実を晴らす為なのです。すみませんが、みなさん協力して下さいませんか？」

男達はまだ、少しざわついてはいたが、誰の反論の声も上がらなかった。

「ありがとう。では……」

才円が隣の部屋のふすまを開けると、そこには怪しげな大きな箱が置かれてあった。箱の周りには色々なスイッチが付いており、箱の中から出た線は、隣の部屋まで続いている。才円は、その箱を指さすと、神秘的な表情を言った。

「実は、あれは西洋から取り寄せた『ウソ発見器』です」

「ウソ発見って……ウソを見抜くの？」誰かが質問する。

「はい。その通りです。人がウソをついた時の、汗や呼吸の微妙な変化を察知して、その人がウソをついているかどうかを判断するのです」

男達の数人から、分かったような分からないような、そんな感嘆の聲がもれる。

「そして、一人一人順番に、あの部屋に入って来て貰い、このウソ発見器にかかっていたいただきます」

才円がそう言つと、男達の中にまた、大きなざわめきが起つた。

「どうぞ」

才円のその声が、閉め切つた小さな部屋に響くと、そろそろとふすまが開き、一人のヤセた男が入つて来て、恐る恐る才円の前に座つた。男はしきりに辺りを見回しながら、恐怖をあらわにしている。才円は手元の書類に目を通すと、冷淡な口調で言つた。

「では、僕の質問には、全て『いいえ』で答えて下さい。それだけで結構です」

「は、はい……」

才円は『ウソ発見器』のスイッチを入れ、質問を開始した。

「では、始めます。さて、この間、愚霊の仲間として打ち首を言い渡された鉄は、実は、無実だと知っていましたか？」

「いいえ」

「実は、鉄は……僕の親友なんです。だから、どんな事でもいい。

手掛かりがつかめたらと！」

「そ、そうですか……」

「あ、すみません、つい、取り乱してしまつて……では、質問を続けます」

才円は順調に質問を続けていた。だが、捜査に熱が入るうちに、次第に才円の様子がおかしくなつていき、質問もおかしなものになつていった。

「鉄は、見ず知らずの貧しく幼い兄妹を、無償で面倒みていると知つていましたか！」

「いいえ……」

「鉄が捕まつたままだと、その兄妹の病気の母が、いずれ死んでし

まう事を……あなたは知っていましたか！」才円は思わず大声を張り上げる。

「い、いいえ……」

才円は、ウソ発見器の計器の針がブルブルと動くのをみて、二、三度うなずく。

「もう結構です。結果は後日お知らせします」

才円は全ての捜査を終えて、大きなウソ発見器を抱えて家路を急いでいた。

その才円の後姿を、塀の陰から密かに見つめる鋭い眼差しがあった。その正体は白髪の老人で、背中が曲がり、顔全体を覆うように髪とヒゲを生やしていたが、老人にしては妙に背が高く、体も自然にガツチリしていた。その白髪の老人は、自分の気配をたくみに殺して、こっそりと才円の後をつけている。

才円が自分の家に入ると、白髪の老人は、ふと痛そうに肩を押さえた。そこには、あの夜、猫女が放ったかんざしの傷があった。老人はその傷を見ると、また不気味に笑い、体をひるがえさせると、人混みの中に消えていった。

今夜は、いつになく明るい月夜だった。月の明かりは、大通りを外れた貧しい家々にも分け隔てなく届く。

その貧しい集落の中の一つに、才円が言った通りに、貧しく幼い兄妹が住む家があった。兄妹は眠そうな目をこすりながらも、今日も病気の母の世話をしている。

その時、家の周りを覆う黒い闇の中から、小さな歩幅でトボトボと歩く足音が近づいて来た。その足音は、その家の近くまで来ると怪しげに家の周りをグルグルとしつこくまわり、遠巻きに様子をつかがっている。この怪しげな人影は紛れもなく、あの日、才円の家を脅迫状を貼った脅迫者だった。

その時、ふいに家の灯りが消えた。家の者達がみんな眠りについ

ただ。

男はそれを確かめると、獲物を狙う獣のように、足跡を殺しながら家に近づいて行く。そして、家の戸口をつつすら開けると、その細い隙間から指を無理に差し入れて、何かをシュツと投げ入れ、いちもくさんに闇の中へ逃げ出した。だが、その男の前に、小さな人影が立ちはだかった。

「待ってましたよ、脅迫者さん」

その小さな人影はそう言うと、一歩、前に進み出る。月明かりがその人影を照らし、才円の顔が浮かび上がった。男はそれが才円だと分ると。急に泣き出しそうな声で、時々詰まりながら話しを始めた。

「僕はどうせ、ウソ発見器とやらで捕まるんだろう？　だ、だけど、その前に、せめて……」

その男は、あのヤセた男だった。そして、男はガツクリとヒザを地面に落とすと、溜っていた物を吐き出すように泣き崩れた。その時、貧しい兄妹の家の灯りが付いて、幼い妹の声があった。

「わあ、小判だ！　お母さん、誰かが小判を置いていってくれたよ！」

才円はその声を聞くと、男を見つめ、優しく微笑んだ。そして、月夜を仰ぎながらこう言った。

「あなたなら、今夜、必ずここに来ると思っていました」

男は黙っている。だが、才円は続ける。

「ウソ発見器など最初からありません。西洋にもあるかどうか……」

「えっ？」

「だけど、これだけは言えます。機械には、人の本当の心など分かりません。そう、さいえんすだけでは、分らない事もあるのです」

才円は男を再び見る。

「しかし、あなたの良心なら、血の通った人間の心ならば、人の本当の心が分ってくれると信じていました。だから、あの可哀想な兄妹の話話を話しました。鉄に無実の罪をかぶせる事は、どれだけけの

人を苦しめる事になるのかと。そして、あなたは今夜……こうしてここに來てくれた」

「な、なぜだ？　なぜ、そこまで僕の事が？」

「あなたをプロファイリングしてみ分つたんです。僕と似ているってね。孤独で周りからバカにされながらも、自分の好きなものに生きている。しかし、あまりにも証拠が少なく、他には何も分らなかった。だから……」

才円は男に手を差し出す。

「もし僕ならば、きつと、今夜、あなたと同じ事をする、僕自身をプロファイリングしたのです」

「すまなかつた……」

男はそう言うと、泣きながら、才円の手を取って立ち上がった。

「それで、あの貧しい家族はこれからどうなるの？」

「すみません、あのけなげな家族は、どこかの名も知らぬ人達です。でも……きつと、あなたなら、友達になってくれると思いますよ」

才円は男から全てを聞いた。だが愚霊の手掛かりは何も得る事が出来なかつた。

男は町を歩いていく時に、たまたま愚霊に脅されて、脅迫状を書いて才円の家に行つただけだつた。

男は愚霊の共犯になつたとしきりに恐れていたが、才円は見逃した。これは脅されてやつた事であり悪いのは愚霊だと、才円はそう言つて男を帰した。

だが、男から何も得られなかつた事で、捜査は結局、また振り出しに戻つたのである。

肩を落として夜道を歩く才円の前を、大きな人影がふいにさえぎつた。それは、あのヒゲの同心だつた。以前、奉行所の前で、才円を突き飛ばしたあの同心だ。

「なにか用ですか？」

才円は顔を上げて、同心をキツと睨みつける。

「なに、たまたま通りかかってな……それで、お前の捜査を全部、見させて貰った」

同心は照れくさそうに言った。

「たかが子供の捜査ですけどね」才円は冷たく言い放つ。

「まあ、そうつつかかるな。こういう事を言うのも恥ずかしいんだが……正直言つと、お前を見ていて、ワシは、正義感に燃えていた若い頃を思い出したんだよ」

「え？」

その同心の表情には、この前とは別人のような優しさが浮かんでいた。才円が呆然としてみると、同心はその大きな手を差し出した。「すまなかった。ワシにも何か、お前の協力をさせてくれないか？」才円はしばらく同心の目を見て考え込んでいたが、少し微笑むと、小さな手をスツと差し出した。同心はその小さな手を、大きな両手で包み込むと、シツカリと握手をした。

愚霊の企み

鉄の打ち首の日まで、もうあまり日数はなかった。

才円は他に何か方法はないかと、西洋の書物を引っ張り出して来て、忙しそうにパラパラとめくり始めた。そして、あるページで、その指はピタリと止まった。

「これだ！」

才円は興奮気味に立ち上がると、わざとらしいくらい猛烈な勢いで独り言を言い始めた。

「こんな捜査法があるとは……まったく、西洋のさいえんすというものは凄い！ これでもう、うつろ船事件は解決したも同然だ！」

その時、才円の家の前で、静かに聞き耳を立てる不審な男の影があった。男はヒラリと身をひるがえすと、賑やかな人ゴミの中を走り抜け、薄暗い路地へ入り、ドンドン奥へと進んでいった。やがて、ボロボロの廃家の前で立ち止まり、周りに誰もいないのを確認すると、男の姿はその廃家へ吸い込まれるように消えていった。

「どうだった？」

廃家の奥の闇から、うなるような低い声がする。すると、男は恐る恐るそれに答えた。

「へい。あの小僧、また新しい捜査法を見つけ出したみたいでヤス」
「なんだと」

そう言つて、闇の中からボウツと現われたのは、全身灰色の不気味な姿だった。まさしくそれは、瓦版にあつた愚霊の姿に間違いなかった。この男こそが、うつろ船事件の仕掛け人といえる、愚霊達の頭であった。

頭がおもむろに立ち上がると、天井に付きそうなくらい背が高く、そのガツチリとした体付きは、男にさらに恐怖を与える。

「詳しく話してみる」

頭が、その巨大なアーモンドのような黒い目を、ゆっくりと男に

向けると、男はたまらず震え上がった。

「へ、へい。なんでも、指先の模様は『指紋』といって、全ての人間が、それぞれ違うものを持っているそうデヤス。だから、犯行現場に残った指紋を調べれば、誰が下手人なのか、すぐに分るのだからデヤス」

「そうか、そんな方法が……全く、未恐ろしいガキだな」

「そうでございヤスね」

「しかし、まあ、日本の奉行所ではまだ、指紋は証拠として認められてはおらぬ。聞いた事さえない。だから、そう恐れる事もあるまい。だが、」

頭は小さな口の右端を上げて、ニヤリと笑う。

「真の盗人たるもの、念には念を入れておかないと……な」

愚霊はそう言うと、男に灰色の手袋を作るように言いつけた。

闇夜の死闘

月もない闇夜の中、屋根の上を飛び跳ねる一つのしなやかな影があった。

「未知の生命体か何かは知らないが、そんなのは関係ない。もうこれ以上、才円に付きまとわせない。愚霊め、今日こそは絶対に尻尾をつかんでやる」

お銀はそうつぶやきながら、また一つ屋根を飛び越えた。

そうやって、お銀が数十軒ほど見回った頃だった。遠くの方に、人魂のように光る物体が、ボンヤリと現われた。

「来た！」お銀は、その光に気付くと、風のように素早く飛んでいった。

だが、急に光が消え去り、お銀が困って、屋根の上からキョロキョロと辺りを見回していると、遠くの屋敷の庭で、複数の黒い塊がうごめいているのが見えた。それは紛れもなく愚霊達だった。お銀は屋根にへばりつくのように姿勢を低くすると、音も立てずに、少しずつ近付いていく。だが、愚霊達は突然、獣のように素早く逃げ出した。

「しまった！」

お銀は屋根から飛び降り、愚霊の一人に素早く飛びついた。すると、その愚霊は体をひるがえし、刀をギリリと抜いて斬りかかってきた。お銀は素早く小刀を出して、それを弾く。ギイン！ という鋭い音が静寂を切り裂いて、闇が一瞬、またたき、火花が散った。

「きさま……」

愚霊はわずかに言葉を発すると、大きく刀を振り回し、鋭い風が何度もお銀をかすめた。お銀はたまらず、地面を転がって刀の雨を避け、一瞬のスキをついてふところの手裏剣を投げつけた。

それは、音を立てて愚霊の顔に当たり、愚霊は思わず体を反らせて、後にズシン！ と倒れ込んだ。だが、愚霊は頭を少し振っただ

けで、すぐに亡霊のように起き上がると、その不気味で巨大なアーモンドのような黒い目で、お銀をギロリと睨んだ。

「こ、こいつ！ 本物の化け物なのか？」

お銀が思わず、そうもらすと、愚霊は獲物を追い詰める獣のように、ゆっくりとお銀に近付いていく。その背はお銀をはるかに超えていて、その灰色の恐ろしげな巨体は、お銀の前に山のような影を作って彼女をゾツとさせた。

「へん、お前が化け物なら、あたしはかまいたちだ！ もう二度と才円には近付かせない！」

お銀はそう叫ぶと、小刀を構えて、弾丸のように愚霊に飛びついた。だが、一瞬、愚霊の手元が銀色に光ったかと思うと、お銀は足をかかえて地面に転がっていた。その足からは、わずかに血がしたたり落ちている。

「くそっ！」

お銀がそう叫んだ時には、愚霊はもう屋根の上にいた。お銀は愚霊に飛びついた瞬間、かいま見た。愚霊の顔が少し破れ、中に木製の仮面が見えていた所を。やはり、愚霊とはただの変装だった。お銀は傷付いた足を引きずりながら、既に小さくなっている愚霊の姿を追った。

お銀は家々の屋根を何度も飛びつきながら、疾風のように愚霊を追う。だが、愚霊も巧みに逃げていく。お銀はうまく動かぬ足を抱えながらも、それでも必死に食らい付いていく。だが、その差はどんどん開いていった。

「ちっ！ こんな傷くらいで！」

荒れ放題の雑木林の中へ愚霊が消えると、そこにはもう闇しか見えなくなった。

お銀は持っていた提灯に灯りをつけると、林の奥深い闇の中に、用心しながら入って行く。自分の背丈ほどもある伸び放題の草をかき分けながら、奥へ奥へと進んで行くと、その草の隙間から、遠くに小さな小屋が見えた。

お銀は忍び足で小屋に近付き、木戸を小さく開けて、そつと中を覗いてみる。すると、その床下に大きな黒い塊が転がっているのが、闇の中にかすかに見えた。お銀が提灯の明かりを向けると、ヒゲの同心の死んだような横顔が浮かび上がった。

お銀は小屋に飛び込み、その同心を抱きかかえると、慌てて外へ連れ出した。そして、お銀が同心の背中にえいっ！ と気合いを入れてやると、同心は目をパチクリさせて、慌てて周りを見回した。「どうした？」

お銀がそう聞くと、同心は息を荒くして答えた。

「はあはあ、すまない……実は、ワシも愚霊を追ってここへ……だけど、木戸を開けて、中に入った途端、いきなり襲いかかられてしまつて……」

だが、お銀は疑わしい表情で、じつと同心を見つめている。

（ひよつとしたら、こいつが愚霊なのではないか？ 私から逃げる為に変装を脱いだのではないか？ 最近、才円と仲良くなったというのも、才円の捜査を見張る為なのでは？ しかし、証拠がない……）

その時、お銀は背後に怪しい視線を感じ、手持ちの小刀を、背後の闇の中へすばやく投げつけた。すると、すぐに、ガサガサという草むらをかき分ける音がして、それは次第に遠ざかっていった。お銀はすぐに後を追ったが、その謎の存在はかすみのようにかき消えていた。だが、お銀が小刀を投げた場所には、小刀が刺さった白い付けヒゲが落ちていた。

（あれこそが愚霊なのか？ そして、私の行動を見張っていたのか？）

お銀はそう考えたが、すぐに頭を抱えて夜空を仰いだ。

（いや、それとも、愚霊の正体は、私が知っている以外の誰かなのか？ ああ、誰もが怪しい……一体、誰が愚霊なのだった？）

お銀は心の中でそう叫ぶと、悔しそうに、その白い髭を握りしめた。

明かされた真実

「うつろ船事件の下手人、愚霊の正体が、とうとう分かりました」
才円はそう言って、正座をしたまま、ゆっくりと頭を下げた。すると、才円の前にいる奉行は、白い着物の襟を正しながら、神妙な表情で言った。

「才円とやら、こうして神聖なるお白州を開いたのだから、よほど自信があるようだな」

「はい、お奉行さま」

才円はヒゲの同心のとりはからいにより、申し立てを奉行所に申請する事が出来た。そして、今日は奉行に、直々に才円の捜査報告を聞いて貰うのである。

広い白州には白い砂が敷き詰められ、辺りには神聖な静けさがただよっている。日は今にも沈もうとしていて雪のような白州を赤く染めていた。そこに、才円とヒゲの同心が正座して座り、その前の一段高い所に、立派な服を着た奉行が、気むずかしい顔をして正座していた。この白州とは、奉行が裁判を行う神聖な場所である。

再び才円が口を開いた。

「昨日、また愚霊による盗みがあったのはご存じですね。そして、僕は犯行現場の指紋を調べてきました。指紋というのは西洋の捜査方法で、人の指先の模様は、すべての人がそれぞれ違っているという事を元に、犯行現場に残された指紋から、下手人を判断する方法なのです」

才円は、粉をまいたものを、墨を塗った黒い紙にのりで貼り付けている物を見せた。その紙には、なにやら渦巻き状の指の跡が付いている。それを見た奉行は、眉間にシワを寄せると、子供をあやすように才円に言った。

「才円よ。西洋では知らぬが、日本ではまだ、指紋は証拠として認められてはおらぬ。万人の指紋がそれぞれ違うとは、日本ではまだ、

立証されておらぬからだ」

「しかし！」ヒゲの同心が、奉行に向かってそう叫ぶ。

「いえ、大丈夫です。もう結論を話しますので」才円はそう言って同心を止める。

そして、才円は立ち上がったてクルリと向きを変えると、スッと腕を上げて同心を力強く指差さし、静かにこう言った。

「あなたが……愚霊ですね」

「バ、バカな！ わたしは同心だぞ！」

同心は思わず、食ってかかる、だが、才円は落ち着き払ったまま、淡々と言う。

「あなたが書いた捕物帳を読んでいて気付いたんです。あなたの字は、愚霊が現場に残していた『みすてりい文字』とソックリだって」

同心の表情が一瞬、固まる。

「フフ……だが、それだけでは弱いな。他に何か証拠があるとでも？」

同心は、急に以前のようないじワルな表情に戻ると、口元を歪めてニヤリと笑う。だが、才円は残念そうに、ただ、首を左右に振る。

「それがないんです、証拠はなにも……」

それを聞いた同心は、腹を抱えて高らかにあざ笑った。

「ハハハハハ！ だろうな」

「本当にもう、全くないんです……まるで、わざわざ消し去ったかのように」

「なに？」同心の表情が一変し、急に青ざめ始めた。二人のやりとりをまるで他人事のように聞いていた奉行の眉がピクリと動く。才円は続ける。

「逆に、これはおかしいとは思いませんか？ 僕はあなたの証言から、昨夜、あなたが倒れていた小屋を調べました。しかし、あの小屋の木戸には、誰の指紋もなかった。あなたは一体、どうやって小屋の中へ入ったのでしょうか？」

同心の額に汗がにじみ始めた。

「つまり、あなたは最初、指紋が付かない服装をしていたのです。だが、中に入るとそれを脱いだ。なぜ、そのような面倒な事をする必要があったのか？ そう考えると、色々な考えが浮かんできます」
奉行は慌てて立ち上がると、手を挙げて部下を呼んだ。ドタドタと騒がしい複数の人の足音が奥から聞こえて来る。才円はさらに続けた。

「あなたは愚霊だった。だが、盗みを働いている所をお銀に見つかり、小屋に逃げ込むと、同心の姿に戻って素知らぬフリをした。そう考えるのが、一番、自然ではないでしょうか」

同心の周りを、複数の役人が慌ただしく囲み始める。才円は同心に近付くと、指紋を付いた紙を地面にハラリと投げ捨てた。

「確かに指紋は証拠として認められていません。万人の指紋がそれぞれ違うとは、まだ立証されていませんからね。だけど、その指紋がなかったとなると……十分に証拠になりませんか？」

才円はそう言うのとニツコリと笑った。そして、最後にこう付け加えた。

「人の部屋を勝手に監視したりするから、こういう事になるんです」
同心は才円の言葉を聞きながら、ずっとワナワナと震えていたかと思うと、急に取り憑かれたように立ち上がった。

「うわああああ！」
同心はそう叫ぶと、手足を振り回して暴れ出し、みんなはワツと散らばった。そのスキに、同心は向きを変えると、いちもくさんに逃げ出した。

愚霊を捕らえたうつろ船

同心は奉行所を抜けだすと、近くの薄暗い雑木林の中に、その姿をまぎらせようとしていた。だが、どれだけ進んでも、人の背ほどもある草が、同心をさいなむようにまとわりつき、同心は次第に体力を奪われていく。そうしているうちに、草木が伸び放題で日も差さないような、荒れ果てた場所に迷い込んでしまった。

「くそっ！ 捕まっただまるか、くそっ！」

その時だった。同心の上空に、ボウツと光りながら浮いている何かがあった。同心は、それを見ると思わず声を上げた。

「う、うつろ船……」

うつろ船は、同心の頭上で狂ったように飛び回った。ジグザグに飛んだり、消えては現われたり、と、まるで同心をからかっているようだった。同心はそれをしばらく呆然と見つめていたが、やがて頭を抱えてその場に崩れ落ちる。それと同時に、うつろ船は消え去った。

「そのうつろ船は、あなたの部屋の天井裏から、お銀がお借りしてきたものです」

同心が、その声のした方を見ると、草をかき分けて才円が現われた。

「そして、あなたがどのようにして、うつろ船を空に飛ばしたのか…… もちろん、それも既に分っています。では、これから僕が、あなたの代わりに解説してあげましょう」

才円はふところから小さな笛を取り出すと、思い切り息を吸い込み、笛を吹いた。薄暗い雑木林の中に、キーンという、うつろ船が現われる前の、あの奇怪な音が響き渡る。

「まず、この笛が、開始の合図です」

すると、木の上に誰かが現われた。その人物は手に持っている大きな丸い物に手を入れ、何かを引き抜いた。すると、その丸い物は

ボウツと光り出し、うつろ船の姿を闇に現わした。その光に、うつろ船を持っていたお銀の顔も闇に浮かび上がる。

「うつろ船はようするに、ただの提灯ちようちんです。中のロウソクの囲いを、外したり、付けたりする事で、光らせたり、消したりしているので
す」

才円は、うつろ船を指さして続ける。

「そして、実際は、うつろ船はあの程度の大きさです。そうでないと、さすがに簡単には持ち運べないですからね。しかし、愚霊がうつろ船に乗って来たという噂をわざと流し、人々の心の中に『うつろ船には人が乗れる』という印象を強く残す事によって、人々は暗示にかかったように錯覚し、うつろ船が大きく見えるのです」

だが、才円は手をあごに当てると、少し考え込むように言った。

「しかし、うつろ船を飛ばす方法は分らなかつた。最初は、凧や風船かと思つたんですが、それでは、高速飛行やジグザグ飛行は出来ない……ですが、ある時、あるものを見て、その謎は解けました」
才円は、そう言つて微笑むと、また笛を吹いた。すると、今度は、遠くの木の上にも誰かが現われた。それはお銀の仲間だつた。その人物もお銀と同じく、手元に大きな丸い物を持っている。そして、それもボウツと光りはじめ、またうつろ船の姿が現れた。

すると、まるでそれが合図であるかのように、木々の上に、たくさんのお銀のうつろ船が光りながら現われた。それは、まるで巨大な螢の空中パーティーのようだつた。

「うつろ船がたくさん……そう、これが、うつろ船が、空を高速で飛び回れるカラクリなのです」

才円がそう言つと、すべてのうつろ船が消え、お銀のうつろ船だけが、闇にボンヤリと光っている。そして、お銀がニヤリと笑い、自分のうつろ船を消すと、それと同時に、はるか遠くにいた者が、自分のうつろ船を闇の中に光らせた。その時、その場は異様な感覚に包まれた。なぜなら、お銀のうつろ船が、一瞬で、はるか遠くまで移動したように錯覚して見えたからだ。

「パラパラ絵巻をご存じですか？ 少しずつ動いている絵を重ねて、一気にパラパラとめくると、絵が動いているように見えるという…」

「…」
才円は持っていたパラパラ絵巻を、パラパラとめくって見せる。その絵巻の中では、うつろ船が、高速飛行やジグザグ飛行で飛んでいた。

「うつろ船が、高速で空中を飛び回る方法もこれと同じです。うつろ船を持った仲間達を、あらかじめ、あちこちの屋根の上に待機させておき、笛の開始の合図により、出したり消したりを繰り返す…」
「あなたは、こうして、夜空にパラパラ絵巻を描いたという訳です」
同心はもう話す事さえしなかった、動く気力さえ無かった。才円のような子供に、自分が企んだ悪事を全て打ち崩されてしまったのだから。

「さあ、もう自主してはいかがでしょうか？」

才円がそう言うと、同心は何を思ったか、急に髪を振り乱して立ち上がり、狂ったように怒鳴り始めた。

「貴様のような子供が！ 子供が！ 子供など、黙って大人の言う事を聞いていればいいものを！ 許さん、絶対に許さんぞおつ！」
同心は目をむくと、腰の刀をギリリと抜いた。その目は明らかに常人のものではなかった。彼はあまりのショックで、もう自分でも何をしているのか分らなくなっていた。

「うおおおおお！」

同心は魔物のような声を発しながら才円に向かっていく。才円は恐怖のあまり、体が動かず、ただ、愛する親友の名を呼ぶ事しか出来なかった。

その時だった。草むらの中から黒い影が獣のように飛び出し、才円がまばたく一瞬に、同心を一本背負いで投げ飛ばした。同心は背中地面をズリズリと滑っていくと、大木にドン！ とブチ当って、白目をむいて、その場にグッタリとのびきった。

その黒い影とは、あの白髪の老人であった。白髪の老人は才円の

方へ向き直ると、曲がった背中をシャンと伸ばし、元気な声でこう言った。

「捕物なら俺の出番だぜ、親友！」

白髪の老人が白髪と白ヒゲを取ると、そこには、色黒で男らしい鉄の顔が現れた。

「鉄あにい！」

才円は気が付くと、鉄の厚い胸に飛び込んでいた。

こうして、うつろ船事件は見事に解決した。

鉄は無事に釈放され、才円と猫女と鉄の三人は、久しぶりの再会を、女中茶屋でのんびりと楽しんでいた。

「しかし、鉄あにいったら、なんでウソの自白なんかしたの？ 物凄く心配したんだからね」

才円が納得いかない顔で聞いて来る。

「いやあ、すまなかった。あれも仕事のうちでな。まあ、今から、全てを話すから聞いてくれ」

鉄はそう言っつて、二人の顔を交互に見ると、似合わない神妙な顔をして、ゆっくりと話し始めた。

「愚霊の盗みの手口を見てオイラは思った。『以前にも、見た事がある』と。それも、今、牢の中にいる、有名な盗賊達の手口だってな」

「へえ」才円は思わず身を乗り出す。それを見て猫女は、やれやれという表情で微笑んだ。

「オイラは、うつろ船事件を解く鍵がここにあると思った。だが、囚人達から、色々詳しい事を聞き出す為には、オイラも囚人になって、そいつらに仲間だと思わせるしかなかった。だから、わざとウソの自白をしたんだ」

「で？ それでどうだったの？」才円は腰を浮かせて、さらに身を乗り出す。

「いやあ、とんでもなかったぜ！ 実は、全ての牢の床下に秘密の

抜け穴があつて、あの同心が頭となつて、愚霊として、そこから盗みに行つてたんだぜ。どうも、全てはあの同心が計画したらしい」「へえ〜」一通り聞くと、才円は椅子にドカツと腰をあずけて溜息をつく。どうやら満足したようだ。

「でも、なんで、あんなおじいさんの格好して、時々、僕の後をつけてたの？」

才円がそう言つと、鉄は、うつ！ という顔をする。

「ま、まあな……牢から抜け出せるつて知つた時、すぐに、お前や猫女の事が気になった。オイラの為に何か無茶して愚霊に狙われてねえか？ つてな。それで、時々、白髪の老人に変装して、陰からお前達を見守つてたつて訳さ」

鉄はそう言つと、照れくさそうに熱いお茶をぐいと飲み干した。才円と猫女はクスクスと笑いながらそんな鉄を見ている。

「さあて、もう仕事しないとね。一応、今は勤務時間だから」

猫目はそう言つと、舌を小さくペロツと出して、慌ただしく席を立つていった。

すると、残された才円と鉄の間に、なぜか不思議な沈黙が流れ始めた。それは、今まで感じた事もない変な感覚だった。

才円がたまらず辺りをキョロキョロと見始めると、鉄は口元の湯飲みで顔を隠したまま、聞こえないくらいの小声で言った。

「才円、オイラはお前の事をずっと見てたぜ……そして、思い出した。俺の兄貴の事を」

才円はハツとして顔を上げ、鉄を見上げた。鉄は静かに続ける。

「兄貴もオイラのようにドジな岡っ引きで、何をやらせても駄目だった。だけど、弱いやつを偉そうな奴らから守る、それだけは一歩も譲らなかつた、命がけだった。そのせいで、最後は不幸な死に方をしたかもしれない。だけど、兄貴は確かに男だった」

鉄は湯飲みを置くと、才円とは目を合わせないまま、懐から古びたボロボロの十手を出して、懐かしそうに眺めた。才円の目から、自然と暖かな涙が一筋こぼれ落ちた。

「これは兄貴の命だった。町のみんなの色々な辛い思いが刻まれているんだ。そして、兄貴自身の、無念の思いも」

鉄は震えるほどに十手を握りしめる。

「なあ、こっちは思わないか？ 自分に出来る事があるならば、たとえ、それがどんなに小さくても、やるしかねえって。そうすれば、そんな力が集まって、こんな世の中だって、きっと、いつか変わるって！」

鉄がそう言つて才円を振り返ると、才円はただ黙つて深くうなずいた。

「この十手を見る度に、オイラは兄貴にそう言われているような気がするんだ。だから、オイラは、いつか、そんな兄貴の無念の思いを……」

「ああっ、そうだ、才円！ お姉様からの事件解決のご褒美、まだだつたわね！」

その声に才円が振り返ると、猫女の表情は、ねずみを狙う猫のように見える変わっていった。

「え？」 才円は嫌な予感に思わず身構える。横を見ると、猫女が、そのプツクリとした唇をすぼめて、もう目の前まで迫って来ていた。「だ、だから、そういうの、やめろつたら！ バカ猫女！」

「いーじゃない。猫女様の唇を、一体、どれほどの客が欲しがってると思つてるの？ オラオラ〜」

猫女が、才円に猫のようにじゃれつくのを、鉄は温かい目で見守っている。

「やれやれ、せっかくのオイラの泣かせる話が……ま、いつか」

鉄は十手を大事そうに懐にしまうと、倒れるほどに椅子に体をあずけ、店内に響き渡るほどの大声で叫んだ。

「とにかく、今日はいい日だ！ みんながいる！ オイラは幸せだな！」

鉄がそう言つと、三人は顔を見合わせて大声で笑つた。それは、ささやかながらも幸せなあの日々が、また三人の元に戻って来た事

を言んでいるのだった。

そして未来へ

才円は腰の刀を重そうに引きずりながら、いつものように、寺子屋の帰り道を急いでいた。だが、彼の背中には、もう悪口の張り紙はなかった。その代わりに、才円の後を力モのひなのように付いて歩く、数人のクラスメイトの姿があった。

「才円先生、いつになったら、さいえんす捜査を教えてくださいませんか？」

「まだダメだよ。まずは、僕がかした本を全部読んで、知識をたくさん蓄えないとね」

「はあ……あれを全部ですかあ……」

「そう。まあ、全部、英語だけど」

そう言う才円はおかしそうに笑った。

才円が、江戸中を恐怖におとし入れた『うつろ船事件』を解いてからというもの、彼はちょっとした町のヒーローになっていた。どこへいっても、人々が寄ってきては、彼を口々にもてはやした。

だが、才円には、そんな事よりも、もっと大切なものがあった。

そして才円は、今、それを二つの目でしっかりと見つめている。それは、通りの向こうから手を振りながら駆けてくる親友の姿だった。「親友！ 難事件だ、またさいえんす捜査の力をかしてくれねえかい？」

「もちろん！」

才円は後の弟子達に別れを告げると、鉄と並んで歩き出した。

「しかし、あれだな、才円。さいえんす捜査って呼び方、こう……江戸っぽくなくて、なんか、しっくりこねえな」

「そう？ じゃあ、どう呼べばいいと思う？」

「そうだなあ、今、巷じゃ、面白れえ仕掛けがあるのを、カラクリなんて言ってるから……『カラクリ捜査』ってのは、どうだい？」

「カラクリ捜査かあ。うん、しっくり来た！ それでいこう！」

二人は声高らか笑い合いながら、長い下り坂を駈けていく。そんな才円を、屋根の上からじっと見つめている一つの影があった。それはお銀だった。お銀は長い黒髪を風になびかせながら、厳しい目をしてポツリとつぶやいた。

「あんたが、そうやって男らしくなっていくのを見るのは嬉しいけど、いつかあたしの敵になるのかもしれないんだね……」

だが、そう切なそうに言うお銀の目は、いつしか、優しい猫女の目になっていた。

鉄に負けにくいくらい元気よく大通りを駈けてゆく才円。しかし、彼はふと考え込むと、立ち止まって、真っ赤な空を見上げる。

「どうした？ 親友」鉄が心配そうに声をかける。

「うん。あのね、僕、思っただ」

「なにをだい？」

「これから数百年たって、カラクリ捜査がもっと進歩してさ、無実の下手人が出ない世界が、そんな夢のような世界が……」

才円は背中を丸めて大きく息を吸うと、夕焼け空に向かって大きく背伸びをした。

「いつか、来るといいなあって……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9176t/>

大江戸カラクリ大捜査

2011年9月11日03時22分発行